

# 湖／湖岸に着目したフィンランド人の居住における 自然環境の3つの意味

北 川 一 美

## 1 はじめに

フィンランドの特色の一つは、湖と水路とエスカーがおりなす景観だと言われる。国土面積の4分の3が森林、10分の1が湖水面であり、湖と島の個数は世界一である（ティーツタ 2001、Saikkonen et al. 1999）。都市は初期から湖岸、海岸、河岸沿いに発達し、水は生活用水として用いられたほか、道路や鉄道の整備前は水路が重要な交通路であり、木造建造物を火災時の延焼から防ぐ役割も負っていた（Kirjakka 1998）。地方の開発においても農業用水が得やすい水辺から定住化が進行した（Saikkonen et al. 1999）。16～17世紀に始まった初期の産業化も、多量の冷却水を必要とする製鉄業だった。それは森林の伐採や水路の開削などを通じて農村景観に大きな影響を与えた（Maaranen 2002）。

都市化の進行した現在では、首都Helsinkiへの一極集中の傾向が強くなり、50万人以上の人口を抱える。総人口が約520万人の国家において人口が10万人以上の都市は6つしかない。その反面、小・中規模な都市の割合が高い（Ijäs 2001）。都市部、特にHelsinki市近郊では人口増加に加えて、家族規模の縮小に伴って、新たな住宅への需要が高まっている。しかし、全国的にみれば、住宅は1,000人あたり439戸（1997年）あり、第2次世界大戦後の住宅不足は解消されたといえる（Saikkonen et al. 1999）。また、同時に、都市部近郊では水辺の建物が増え、everyman's right<sup>1)</sup>が満たされる水辺が大幅に減った。そのため、従来は水辺の建物は自治体の都市計画なしに建てられたが、それらに対しても一部の例外を除いて1996年以降は法的な制限が加えられている（Granö et al. 1999）。

このような状況下で、一般的にフィンランド人の理想の住居は「都市機能に近く、湖のそばの一

軒家」であると言われている。この水辺志向は、筆者が行った住宅地開発にかかわる専門家11人へのインタビュー（第2章参照）によっても明らかとなった。理想を実現し得ない特に都市生活者は、別荘を所有したり借りたりして一定期間そこに滞在して欲求を満たしている。では、実際に理想の実現化を目指して湖岸に建設された住宅地での実情はどうなっているのか。本稿では、事例として1991年のハウジングフェアの際に開発されたVarkaus市Puurtilanniemi地区を取り上げ、湖／湖岸に着目しながら、住民が住環境としての自然環境をどのようにとらえているのかを整理することを試みた。

居住と（自然）環境のかかわりはフィンランドにおいても早くから地理学的な興味を引き、例えばGranö（1952）が景観を重視しつつ、集落の立地を「農地型（field type / dwelling surrounded by fields）」、「沿岸型（coastal or shore type）」、「沿線型（road type）」などに、また「低地型」と「高地型」に分け、それらの組み合わせで全ての集落が説明づけられるとした（National land survey of Finland 1992）。またKämäräinen（1974）はフィンランドの都市の住民が住環境に自然要素として森や林を求めていることを明らかにした。しかし、既存の調査（例えばLoma-asuntomessu-tutkimus Savonlinna 2002）で湖の存在の重要性が明らかになっていながらその存在の意味が議論されておらず、住環境における湖／湖岸に着目して住民の意識を問うことは意義がある。

なお、本稿は2003年度に提出した修士論文を大幅に加筆修正したものであり、概要は2004年度日本地理学会春季学術大会（於：東京経済大学）で口頭発表した。

## 2 方法

本研究は日本国内での文献調査、現地との郵便

や電子メールのやりとり、インターネット上での情報収集に加え、2回の現地調査によって進められた。

1回目の現地調査は2002年9月2～17日に行った。内容は、①Varkaus市のハウジングフェアに関する情報収集、②フィンランド全般的の都市計画制度や住宅事情などの調査、そして最も時間を費やした③環境省や1991年のハウジングフェア担当者、ハウジングフェア協会の職員など合計11人の専門家へのインタビューであった。インタビューは英語で行った。以下の記述で注や文献を付していない部分は、インタビューで得た情報である。

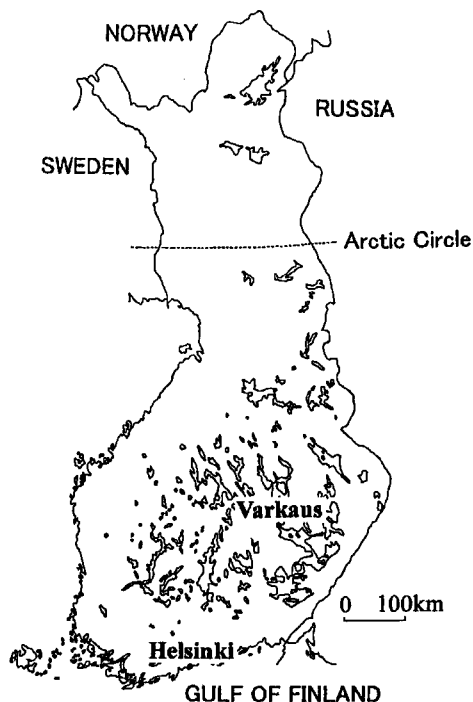
2回目の現地調査は2003年2月26日～3月22日に行い、文献調査の拡充のほか、④Puurttilanniemi地区の住民を対象とした質問票調査の実施、⑤比較のために過去の他のハウジングフェア開催地5ヶ所の現地観察を行った。質問票調査では、既存の調査<sup>3)</sup>では言及されていなかった住環境としての湖／湖岸という視点から、人々の評価、利用方法、希望などについてフィンランド語で質問した。質問票と返信用封筒は、対象地区の全111世帯に配付し、有効回答数50(回収率45%)だった。当地区の全住居では賃貸用が64%なのに対し、回答者の54%が賃貸住宅で生活していた。また、全住居では一戸建住宅30%、低層連続住宅・高層住宅70%に対し、回答者の住居の内訳は一戸建住宅32%、低層連続住宅・高層住宅68%だった。

### 3 調査対象地概要

#### 3.1 Varkaus市

フィンランドはアイスランドと共に世界最北の独立国家であり、総面積338,145 km<sup>2</sup> (2001年)の約4分の1が北極圏内にある。しかし大西洋の(メキシコ)湾流に暖められた偏西風などによって寒気は和らげられるため、年間平均気温は同緯度の他の地域と比べて6～10℃高い(ティーツタ2001)。

Varkaus市はHelsinki市から北東約320 kmに位置する中規模工業都市である(第1図)。周辺のフィンランド東南部は湖水地方と呼ばれており、市域面積約112 km<sup>2</sup>の約22%にあたる25.15 km<sup>2</sup>が水面である。人口は約23,000人で人口密度は



第1図 Varkaus市とフィンランドの主な湖

267.5人/km<sup>2</sup>である<sup>3)</sup>。豊富な森林資源と水路による交通の便のよさから、1815年に製鉄業で最初の工業化がおり、1834年に製材所の操業が開始されたが、1920年代に開始された製紙業が今日に至るまでの重要な産業である(Lönnroos 2002, Moilanen 1991)。

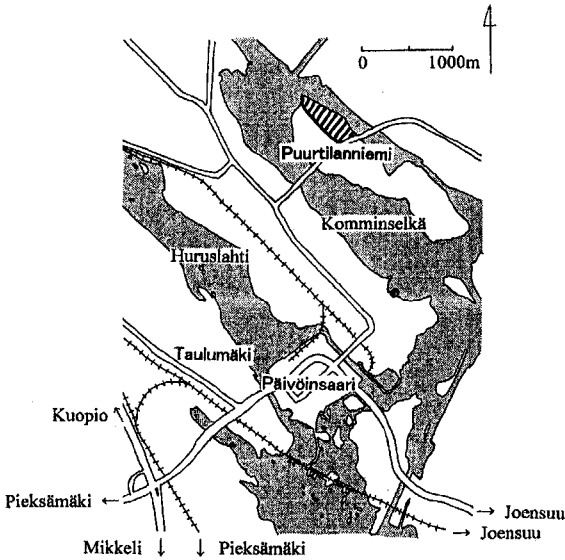
当市の発展過程は、Kortelainen (2002) が示した典型的な森林産業都市の3段階の動向と一致する。つまり、①19世紀後半から1960年代までのいわゆる「企業城下町」の時代、②1960年代から1970年代後半までの林業における合理化の時代、③1970年代半ば以降の森林産業の合理化・衰退がみられる時代を経験している。初期に重要な役割を果たしたのはAhlström一族だったが、国際競争が激しくなる中で工場や企業の買収、合併があり、現在はStoraEnso社として営業している(Moilanen 1991)。

製紙工場周辺から下流の湖水の水質は細かく監視され、毎年、企業と自治体が共同で調査・報告を行っている。また、環境省も全国約10,000地点で観測したデータを基に水質の状態をまとめた地図を作成しているが、それによると1994年から1997年の状況(Vesien laatu 1994-1997)は下流側

で5段階評価中3番目により評価である。Puurtilanniemi地区を含む上流側は2番目により評価を得ている。

### 3.2 Puurtilanniemi地区

当地区は中心地（Taulumäki、Päiviönsaari）から3～5 kmの距離にある（第2図）。都市機能と製紙工場を背にし、前方に湖と森林を持つ立地となっている（写真1）。面積は約19 haで、現在111戸あり、そのうち23戸が一戸建住宅である。Puurtilanlahti湖に面しており、私有湖岸を持つ住



第2図 Varkaus市の中心部（Taulumäki、Päiviönsaari）とPuurtilanniemi地区の位置  
 (注) 斜線部が調査対象地。灰色部は湖水域。

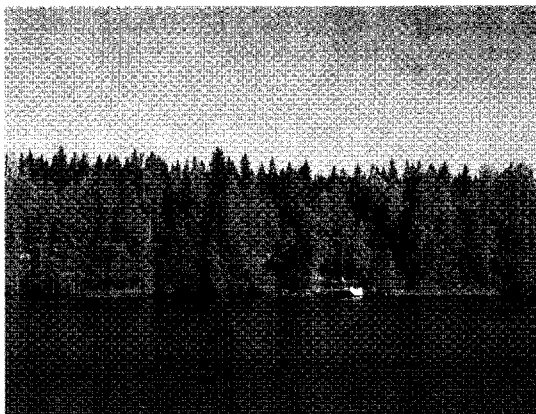
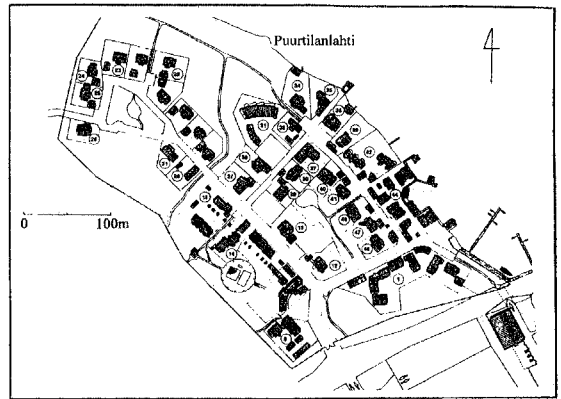


写真1 Puurtilanniemi地区よりPuurtilanlahti湖を臨む：2002年9月筆者撮影

居のほか、持たない住民も湖にアクセスできる拠点として2ヶ所の湖岸の休憩施設（pier）が、またその1ヶ所には屋内に敷くマットの洗濯用水道設備が設けられている（第3図）。

開発は1991年のハウジングフェア（第4章参照）のためになされた。Varkaus市内での開催地の選定にあたり、①Saimaa湖やKuopio市につながる湖岸にあること、②広さが適当であること、③土地の所有権が全て自治体にあること、などを理由として当地区に決められた。当時、現地は農地（牧草地）であったが、コンペティションのもとに都市計画が策定された。「湖岸に住む」ことがテーマの一つとされ、優勝案の湖岸（湖上）の低層連続住宅（laguunitontti）が当地区の特色として採用された（写真2、写真3）。その他にも、湖



第3図 Puurtilanniemi地区（ハウジングフェア会場）  
 (注) 1991年6月19日付 Savon Arkki Sanomat紙42-43の一部改変。Puurtilanlahtiは湖の名称。

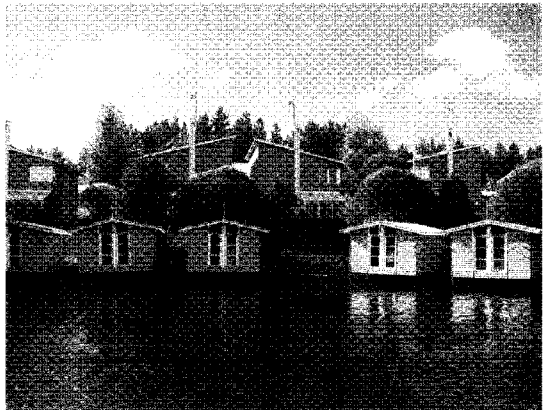


写真2 laguunitontti：2002年9月筆者撮影

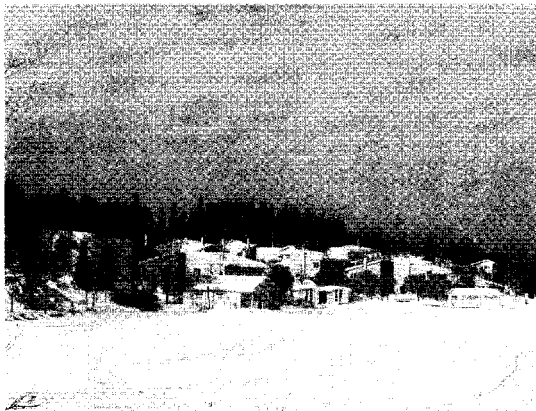


写真3 laguunitontti : 2003年3月筆者撮影

岸に公共のスモークサウナが建設されたり、全住居にインターネットへの接続端子が設けられたり、それとパソコンを全世帯が所有することによる地域内の交流ネットワークが計画されたりした。

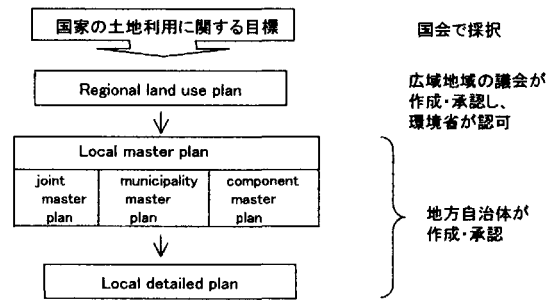
当地区は、①別荘地としてではなく「住宅地のモデルケース」として開発されたこと、②住居の延べ床面積が国内の平均水準にあること<sup>9)</sup>、さらに、③ライフスタイルの一つの指標である通勤・通学のための交通手段が国内の平均像を示していること<sup>9)</sup>、などから平均的な住宅地の一つと位置付けることができる。

## 4 住宅地開発の実際

### 4.1 都市計画制度

フィンランドでは国家レベルの都市計画は環境省が監督しており、同省は環境大臣と住宅大臣が統括している。住宅に関する政策を担うのは都市計画や住宅の条件・規制の決定などを行う全国に13ある地域環境センターや自治体と、公的ローンの運営や住宅の質の向上に向けた助成などを行う住宅基金の2つに大別される。本節では実質的な都市計画に関係する前者における計画の流れを紹介する(第4図)。

都市計画では、まず前提として国家の土地利用に関する目標が国会で採択される。そこでは地域構造や住環境の質、インフラの整備のほか、生態学的持続性や自然・文化遺産保護についても規定される。つまり、自然保護への配慮は計画の最初の段階からなされている。目標設定の後、その実施計画が3段階で組まれる(Saikkonen et al.



第4図 フィンランドの都市計画制度

1999: 以下の用語は分かりやすくするために英訳されたものをあげる)。

第1段階は広域地域の議会 (regional council) が作成・承認し、環境省が認可する regional land use plan である。ここでは主要道路網や主要電線網が線引きされる。同時に、地域・コミュニティーの構造や各種ビジネス・産業への経営環境の提供が規定されるほか、景観保存や生態学的持続性が考慮される。広域地域は2002年現在20あり、それらは地方自治体が複数集まったものである (Statistics Finland 2002)。

第2段階は地方自治体 (local authority) が作成・承認する local master plan である。これはさらに細分され、近隣の自治体が共同で作成する joint master plan、自治体独自で作成する municipality master plan、自治体内のさらに細かなレベルについて作成する component master plan がある。これらは通常10~20年おきに作成され、学校、病院、商業施設、ビジネス地区、住宅地区などの配置が定められる。全体的な戦略計画と特定の建物への直接的規制の両者を含む。またコミュニティーの利便性や経済性、住環境の質の維持のほか、自然・文化遺産の保護や環境ハザードの縮小に向けた対策が設定される。

第3段階は地方自治体で作成・承認する local detailed plan である。ここでは細かな道路や建物の種類など、さらに下位のレベルで計画がなされる。十分な公園やレクリエーションエリアの確保など、物理的景観の形成や建造物の規制・調整がなされる。計画策定への住民参加が進められているが、本計画は彼らからの異議がなければ、発案から1~1.5年で確定する。

### 4.2 ハウジングフェア

ハウジングフェアとは基本的に、毎年夏の1ヶ月間、建築技術の向上や市場開拓などを目的として新しい住宅地を開発して行われるものである。そして、フェア終了後にその地域は普通の住宅地となる。

主催者は1966年6月に設立されたハウジングフェア協会（Suomen Asuntomessut: The Finnish Housing Fair）と開催地の自治体である。最初のフェアは1970年に行われ、以後2003年までに延べ34自治体で開催された。その過半数が中部以南の自治体である。入場者数は、多い年でフィンランドの総人口の約5%にも達した。

開催地は自治体からの申込をもとに、約5年前にハウジングフェア協会によって選考・決定される。またそれぞれのフェアには特色・テーマが設定されており、後にその時代背景を探る手がかりともなる。

Varkaus市のケースでは、1984年に市役所内でハウジングフェアの開催の提案がなされ、開催の立候補をした。1986年にハウジングフェア協会が視察に訪れ、1987年に開催が決定した。当時、Puutilannimi地区は、市内のPuutila地区を対象としたcomponent master planの中に含まれており、1990年代に主に低層住宅の住宅地が広がるという計画がなされていた。そこでその計画がハウジングフェア会場として実現されたのである。さらに1991年のフェアでは工業都市のVarkaus市らしく、1920年代の労働者住宅を修復してアパートや博物館などによみがえらせたNiittyliä地区も同時に会場となった。

## 5 自然環境の3つの意味：質問票調査の結果を中心に

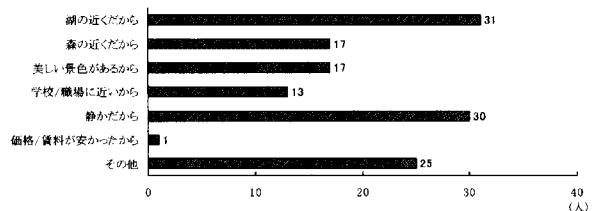
### 5.1 住環境に望まれる景観として

質問票調査の結果によれば、Varkaus市内からPuutilannimi地区へ転居した回答者が66%を占めた。当該地区を選んだ理由としては「湖の近くだから」を挙げる回答者が最も多く、同時に住環境に静けさを求める傾向も明らかとなった（第5図）。静けさの要因ともなる、森の近くであることを挙げる回答者も3番目に多かったが、その過半数が近くの森に新しい建物が建設されることになっても賛同するとした。さらに、少数意見であるが、住居の構造上の特徴（例えば間取り、外観、

内装など）を理由とする回答者もあり、家族構成の変化に合わせて転居する現状がある。また人口密度の低さによって、湖の近くであることと、学校/職場の近くであることを同時に満たしうることでも明らかとなった。

「湖の近くに住む」という希望をかなえた住民が身近の湖をどのように評価しているかについては第6図が参考になる。Puutilanlahti湖の水質、景色ともに美しいと感じている回答者がほとんどであった。実際、転居理由として「景色の美しさ」が3番目に多く挙げられている。また、水質の状態は1982～1985年の調査以降に測定されていないので明確ではないが、当時は全ての調査項目において5段階評価でよい方から3番目以上を示し、水質はよいとされた。その後に調査が継続されなかった理由について、現在の環境省の担当者は「水質がよいまま変わっていないという判断があるからではないか」と答えた。

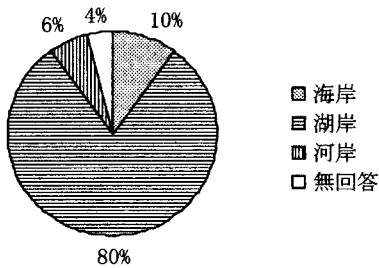
では、水辺であれば海辺でも河辺でも構わないのかといえばそうではない。水辺に居住したいとする理由として、「景色あるいは水辺そのものが好きだから」、「（水泳、釣り、ボートなどで）楽しめるから」などが挙げられたが、最も住みたい水辺は8割が「湖岸」と答え、湖の持つ意味の大きさが伺える（第7図）。海岸ではなく湖岸を希望するのは「風が弱いから」とする回答者もいた。



第5図 Puutilannimi地区へ転居した理由（複数回答）

	水(質)をきれいだと思いますか？			計(人)	
	はい	いいえ	分からない		
景色をきれいだと思いますか？	はい	39	1	6	46
	いいえ	1	0	0	1
	分からない	0	0	3	3
	計(人)	40	1	9	50

第6図 Puutilanlahti湖の水質及び景色に対する評価



第7図 最も住みたい水辺

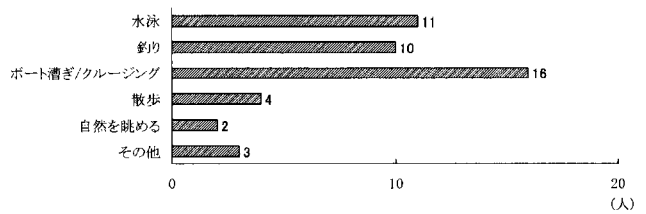
質問票の選択肢には「水辺に住みたくない」という項目も設けたが、これを選択した回答者はいなかった。

これらの結果から見出せるのは、住民にとって自然環境は景観美として受動的ないし精神的に捉えられるものである、ということである。つまり、「美しい湖を眺めながら暮らしたい」ということだが、「美しい自然のもとに暮らしたい」と考えることは、我々の感覚からも予想のつくところである。では、水辺の暮らしという希望をかなえた住民は周囲の自然（湖／湖岸）をどのように利用しているのだろうか。

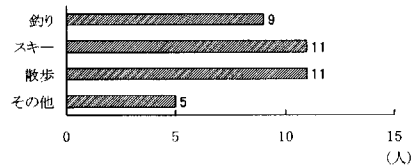
### 5.2 日常の活動の場として

質問票調査の回答者の94%が余暇に（一般の）湖を利用すると答えた。Puurtilanlahti湖に限れば、夏期には68%が、冬期には56%が利用する。その利用方法は、夏期は水泳、釣り、ボートが代表的である（第8図）。ボート／ヨットは回答者の52%が所有しており、その約3割が賃貸住宅居住者である。ボート置き場はPuurtilanniemi地区の端にも設けられている。一方、冬期の代表的な利用方法は釣り、スキー、散歩である（第9図）。釣りは凍った湖上に穴を開けて行うもので、スキーはいわゆるクロスカントリー風のスキーである。また一般的にはスケートも湖上でなされるが、Puurtilanlahti湖に限ってみると盛んではない。自家用ボートは冬期には放置されたままである。

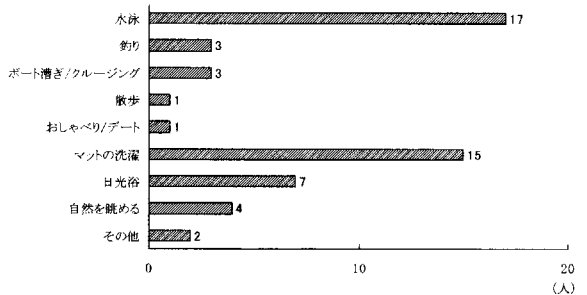
湖岸の公共施設として、2つのpierの利用に着目すると、夏期には回答者の約半数（48%）が毎日訪れている。利用方法としては、水泳（の出発地点や休憩地点）とマットの洗濯が目立つ（第10図）。逆に利用しない回答者の理由は「私有のpierを持つから」、「別の場所に自分のボートがあるから」、「夏は別荘やボートの上にいるから」な



第8図 夏期のPuurtilanlahti湖の利用方法（複数回答）



第9図 冬期のPuurtilanlahti湖の利用方法（複数回答）



第10図 夏期のpierの利用方法（複数回答）

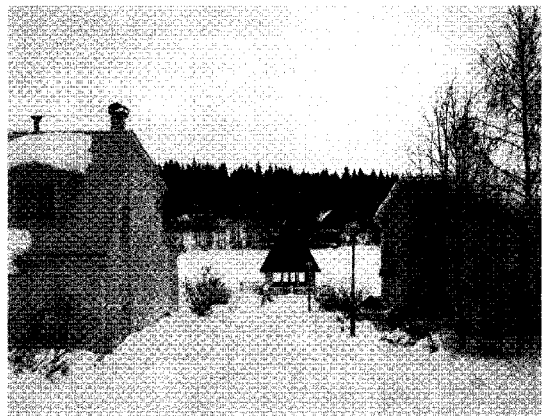


写真4 冬期のpier：2003年3月筆者撮影

どである。一方、冬期には、雪に閉ざされている、直接水上へ出るので通過する必要がないなどの理由から、週に1回程度の利用が最高頻度で、回答者の40%だった（写真4）。

これらの実態から、湖／湖岸は能動的ないし行動的にレクリエーションや洗濯場のために利用す

るものであることが明らかとなった。ここで特徴的なのは、一定期間そこにとどまった利用ではなく、その利用方法が日常生活のレベルにとけ込んでいることである。「遊住接近」と表現することができよう。

### 5.3 他者と距離をおくための空間として

先述の通り、住民は頻繁に日常生活の中で湖／湖岸を利用している。では、その際、周辺住民とはどのようなかかわり方をしているのだろうか。

現状では、利用の頻度に反して、湖岸の個々の公共の施設は皆に有効に利用されていない。例えば、公共のスモークサウナや冬期の pier などである。スモークサウナはフィンランドの伝統的サウナで“mother of sauna”とよばれ、湖岸の暮らしを特徴づけるための Puurtilanniemi 地区の開発における目玉の一つであった。そして、その建設費用が当初の住宅販売価格や賃貸料によって賄われているにもかかわらず、また住民は頻繁に近くを通るにもかかわらず、過半数がその存在すら知らない。その理由の一つとなりうるのは、現地に住宅地開発当初から居住している世帯が14%しかないという点である。居住年数が5年以下の世帯が50%あり、永住希望を持つのは72%で、14%が中心地へ遠いことや住居を自己所有したいことなどを理由に転出したいと考えている。また、pierについては、冬期は78%の回答者が利用をしておらず、雪かきがされていないように近づくための管理もなされていない。

それぞれの住宅に関しては、建物同士が近すぎるという否定的意見が聞かれた。特に、laguunitonttiに限ってみれば、「美しい」、「湖岸の暮らしを実現したものだ」などの好ましい評価がある一方で、「建物が小さすぎる」、「賃貸なので管理が行き届いていない」、「子どもにとって（水に落ちそうで）危険な場所である」などの意見もある。私有湖岸を持たない世帯には私有湖岸に対する大きな憧れも見られた。

さらに、フィンランド人のインターネット利用状況が世界有数といわれる中で、地区内の全戸に備え付けのインターネット接続端子や、パソコンを利用した地区内の交流システムはほとんど利用されていない。パソコンを所有することが入居の条件だというのが、実際に持たない世帯もあるとみられている。だが、「外」への関心の高さは否め

ない。その一例が図書館の利用率の高さだろう。Varkaus市立図書館では2001年に（延べ10,668人に）508,029冊の貸し出しがあった<sup>6)</sup>。これは人口1人あたり22.1冊/年の貸出に相当し、日本の1人あたり平均4.2冊/年、またVarkaus市と人口が同程度（約23,000人）の天竜市2.5冊/年、勝浦市1.3冊/年、大口市2.3冊/年などと比較してもその差は明白だ<sup>7)</sup>。これに反して、自宅では電子メールを利用しなかったり、公有地の管理運営を自治体任せとする部分が大きく積極的な地域活動が行われなかったりするなど、個人の部分では公共的なものを否定する傾向がみられる。

以上から、「個人」あるいは「家族」に対する強い意識を読み取ることができる。そして、（湖／湖岸に限らず）自然は他者と距離をおくためのものとして認識されている。そこには心理的なものも含まれる。具体的には、隣家との区切りが塀ではなく森であった方が落ち着くということである。「隣人（家）はできる限り遠くにいる方がいい」とよく聞かれることから証明できる。実際に Puurtilanniemi 地区の開発の際には、Puurtilanlahti 湖の対岸の住民（1世帯）がこれに反対し、結果的に彼らが転居していったという。こうした事態は一見すると、フィンランドで認められた everyman's right の考え方と矛盾しているように思われるが、重要なのはこの権利の「互いのプライバシーを侵害しない範囲で」全ての人が自然に自由にアクセスできると考える点である。そして、その範囲の設定はそれぞれの場で当事者の判断に任されており、この意識がバランスを保って存在しているのは、戸外の自然が豊富だからこそであろう。

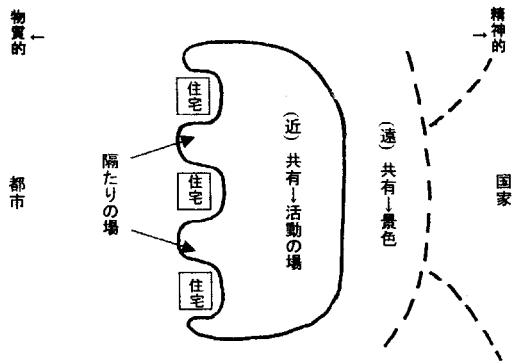
## 6 まとめ

### 6.1 自然空間の分類と連続性

第5章において、それぞれの意味から住環境における自然環境が3つに分類しうることを紹介した。それらは互いに対立概念のように見えるが、空間的に表現すれば連続した概念としてとらえることができる（第11図）。

実質的な都市計画によって建設された都市（機能）を背にして存在する住宅地が本研究における対象地区（Puurtilanniemi 地区）である。

そこから前方のより遠くの共有の自然は景色と



第11図 空間のとりえ方

して認識される。近くの共有の自然、本研究の場合は湖／湖岸（さらに具体的に記せば Puurtilanlahti 湖）は活動の場として住民に日常的に利用される。しかし、さらに各住居に近い空間には、他者との隔たりの場としての役割が与えられている。このように住環境における自然空間は3つに分類されるが、それぞれの住宅地や集落から成る同様のかたまりはいくつも重なり合っている。

それらを最終的に精神的な収束点としての国家にまとめあげるために利用されたのが、『カレヴァラ』などの文学作品や風景画などだったのではないだろうか。実際、ロマンティズムの時代（18～19世紀）に多くの国々が歴史上の遺跡を民族的アイデンティティの形成に役立てる中、フィンランドでは数々の著作や芸術作品によってその基盤が築かれた。それまで重要な創作はほとんどがスウェーデン語で書かれていたが、フィンランド語文学を生み出そうとする意識的な努力が進められた（クリング 1994、フィンランド大使館 1990）。また、フィンランドの自然を理想化した絵画や「民族的伝統」に回帰した建造物が造られた（クリング 1994、吉原編 1980）。そして「フィンランド人が理想とする自然」や「フィンランド独特の景観美」などの共通の意識が作り上げられ、近代国家形成の際の土台となったのである。その後、製鉄所や繊維工場などのある風景が強調される時代もあったが（Raivo 2002）、現代では、EUへの加盟に伴い、フィンランド人のアイデンティティとして「フィンランド独特の自然の景観美」が再認識され強調される傾向がみられる<sup>8)</sup>。

## 6.2 理想と現実

近年、住宅に関して、自然的要素や地球環境保全にまつわる内容が大きく掲げられる傾向は、フィンランドでもみられることである。10年以上前に開発された Puurtilanniemi 地区では、既に湖とのかかわりが強調されていた。当時そこは「まちの中心部に近く、湖岸に建つ一戸建て住宅に住める」と宣伝された。日常的に湖に接することが可能となるからこそ、わざわざその近くに転居することすら起こり得たのである。しかし、その反面、このことは多かれ少なかれ自然の劣化を招いている。また、親は「子どもが水に落ちてしまうのではないか」という危機意識を持ち、結果的に幼い子どもがいる家庭を湖から遠ざけている。こうしたジレンマは環境問題対策とユニバーサル・デザインの両面を実現させる難しさと同様である。

一般的に言われている水辺志向を実態から見直してみると、住環境における自然環境の理想は第5章で述べた3つの意味がバランスよく得られることであることが明らかとなった。しかし、一方で自然と都市機能へのアクセスはトレードオフの関係にあり、また調査結果によれば、Puurtilanniemi 地区は全ての住民にとって文句のない理想的住区とは言えず、個人ごとになんらかの折り合いをつけた結果そこに集住していることが分かった。そして、他地域への転居を希望したり、休暇に何日間も自家用ボートに乗って湖上で過ごしたり、より自然に親しめる別荘で過ごす住民もいるのである。

今後、同様の調査を複数の住宅地で行い、それらの結果を比較することにより、地域特性や水辺志向以外の要因を優先して住環境に選んだ住民の理想とする自然空間の在り様などを見出すことが期待できる。

## 謝辞

資料収集や現地調査では多くの方々から情報をご提供いただいた。インタビューに快く応じてくださった Jukka Saikkonen さん、Jukka Hyttiäinen さん、Kirsi Nipuli さん、Tuomas Kettunen さん、Kaj Pirinen さん、Mai Koivula さん、Matti Reijonen さん、Merja Mähönen さん、Petteri Wilenius さん、Heikki Sinkko さん、Heikki Lonka さんには1991年のハウジングフェア当時の貴重な経験や現在の都市計画の状況などを伺った。さらに、Kaija



Koskinenさん、Carita Nybomさん、Simo Riikonenさん、Kaisa Soininenさん、Taina Hammarさんにも情報提供をいただいた。質問票調査では、Puurtillanniemi地区の住民の方々にご回答いただいた。また、現地調査のきっかけを作ってくださったJohanna Nurmi先生、Yrjö Kainulainenさんにもお世話になった。

全てのお名前を挙げるのは不可能だが、ご協力くださった全ての方々に厚く御礼申し上げる。

#### 注

- 1) 公有地・私有地にかかわらず、全ての人が森林や湖岸などの自然環境／土地に自由に入り、恵みを楽しむ権利があるという考え方。ただし、「焚き火は許可を得なくてはならない」などの規則はいくつかあり、所有者のプライバシーも侵害してはならない(ティーッタ 2002、Tuunanen 1999)。一般的に「自然享受権」と訳される。
- 2) 例えば、環境省が行ったAsukasbarometri 1998、Espoo市が行ったEspoolaisten asumistoiveet 2000、Suorakanava社がハウジングフェア会場で行ったAsuntomessututkimus Kotkassa 2002など。
- 3) Tasku Varkaus 2002 (Statistics on the city of Varkaus) による。
- 4) Varkaus市から提供された資料をもとに筆者が計算したところ、対象地域の平均は98.7 m<sup>2</sup>だった。それに対し、1990年に建設されたフィンランド国内の住宅の延べ床面積の平均は79.9 m<sup>2</sup>だった。しかし、対象地域の一戸建住宅の比率は35.5%で、全国平均(ただし1-2階建て住宅)の23.8%を大きく上回る。またハウジングフェア会場であったことも考慮に入れると、代表性を示すと考えて問題ない。
- 5) 1998年のフィンランド国内住民調査(Asukasbarometri 1998)の結果と、筆者が2003年3月に行った対象地域での質問票調査の結果を比較した。
- 6) Tasku Varkaus 2002 (Statistics on the city of Varkaus) による。
- 7) 2001年度実績。データの出所は、日本図書館協会(図書館調査事業委員会)編。2003。『日本の図書館統計と名簿2003』日本図書館協会：16-17, 72-73
- 8) 2002年6月8日から10月5日までヘルシンキ大学図書館内で開かれた展示会“The Finnish landscape”での配布資料による。

#### 文献

クリンゲ, M.著 百瀬宏訳 1994. 『フィンランド小史』フィンランド大使館. Klinge, M. 1992. *A brief history of*

*Finland*. Helsinki: Otava

ティーッタ, A.著 フィンランド大使館広報部訳 2001. 『Find out about フィンランド』ヘルシンキ：オタヴァ出版社. Tiitta, A. 2001. *Find out about Finland*. Helsinki: Otava.

フィンランド大使館. 1990. 『フィンランド Facts about Finland』

吉原俊一編. 1980. 『ミリオーネ全世界事典 第4巻ヨーロッパ』学習研究社

Granö, O. 1952. Settlement of the country. In *A general handbook on the geography of Finland*, 340-380. Helsinki: The geographical society of Finland

Granö, O., Roto, M. and Laurila, L. 1999. *Environment and land use in the shore zone of the coast of Finland*, Turku: Department of Geography University of Turku

Ijäs, T. 2001. Housing policy challenges in the 21st century. In *Asumistaso 2000-2001*, 77-78. Helsinki: Oy Edita Ab

Kirjakka, M. 1998. Water in Finnish towns-in the past. In *Water and waterscape in urban environment (conference proceedings)*, 59-64. Espoo: Forum Espoo

Kortelainen, K. 2002. Forest industry on the map of Finland. *Fennia* 180 1-2: 227-235

Kämäräinen, K. 1974. *Luonto kaupunkilaisen elämässä ja ympäristössä*, Tampere: Tampereen yliopisto Aluetieteen laitos

Lönroos, M. 2002. *Varkaus ihmisen mittainen kaupunki*, Hämeenlinna: Karisto oy

Maaranen, P. 2002. Human touch, natural processes: The development of the rural cultural landscape in southern Finland from past to present. *Fennia* 180 1-2: 99-109

Moilanen, P. 1991. *Varkauden teollisuus 175 vuotta*. Varkaus: Varkauden museo

National land survey of Finland. 1992. *153 Settlement (Atlas of Finland 5 edition)*, Helsinki

Raivo, P. 2002. The Finnish landscape and its meanings. *Fennia* 180 1-2: 89-98

Saikkonen, J., Strandell, C. and Karkinen, K. eds. 1999. *The built environment in Finland*, Helsinki: Ministry of the Environment

Statistics Finland. 2002. *Kesämökki 2001*, Helsinki

Tuunanen, P. 1999. *Everyman's right in Finland*, Helsinki: Ministry of the Environment

---

きたがわ かずみ

お茶の水女子大学大学院2003年度博士前期課程  
修士

## Three aspects of natural environment in Finnish habitation

Kazumi KITAGAWA

### **Abstract**

The aim of this research is to find out the meanings of natural environment, especially lakes/lakesides, in Finnish habitation. The research was conducted in Puurtilanniemi area, Varkaus. The process of its plan and building, the residents' utilization of the environment and their view of the living environment were investigated through interviews and a questionnaire survey.

In conclusion, three perceptions of natural environment were found. The first one is the appreciation of beauty of nature that they have passively. The second one is the evaluation of nature that they utilize in daily life. The third one is the relief of keeping their territory from others. Focusing on lakes/lakesides in this research, the second "nature" means the water body and the shore of Puurtilanlahti.

Those three concepts are related to each other spatially (Figure 11).